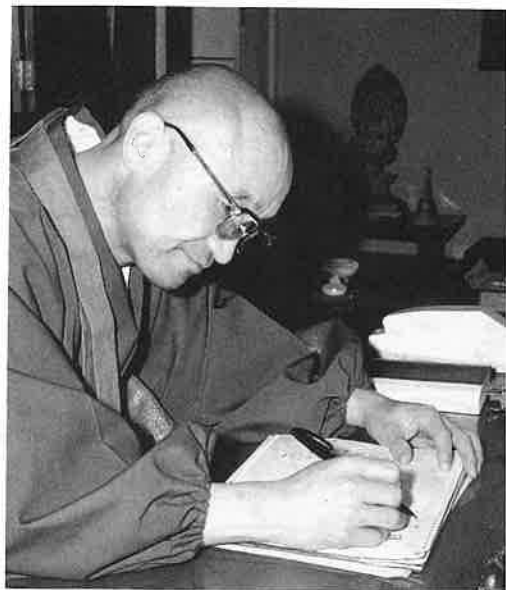


# お釈迦さまのご誕生

黒田 武志  
(大圓)



仏教では、生老病死を四苦と申します。それは人間として、のがれることのできない宿命であります。生まれ落ちる時すでに持っていたという苦を、お釈迦さまは、どのようにして見つけられたのでしょうか。

私たち自身を振り返ってみましても、誰ひとりとして、生まれる瞬間の苦しみを憶えている者はありません。

生まれ出ずる苦しみについて様々な推測をすることができたとしても、現実の記憶というものは呼び覚ますことができません。お釈迦さまも、ご自身の出生に関しては、何ひとつ語り残されませんでした。

仏典には、お釈迦さまのご誕生の物語を、偉大な宗教家がこの世にお生まれになったという、よろこびの言葉で書き記しています。

お釈迦さまは、当時、大きな勢力を持つていたコーサラ国に従属する釈迦（シヤカ）族の王子として、ルンビニという小さな村でお生まれになりました。

母上のマヤ夫人はコーリヤ族のご出身でしたから、お産をする為に里帰りされる途中だったのでありましょう。ルンビニは、釈迦族のカピラ国とコーリヤ国の、ちょうど中ほどにある村でした。

ルンビニは花々が咲き乱れ、鳥が飛び交う美しい緑の園だったといわれております。

漢訳仏典では「無憂樹」と呼ばれておりますが、マヤ夫人が、赤い花をつけたその無憂樹を一枝折ろうとした時に、右脇からお生まれになったと書かれています。

その時、尊い人の出生を祝福して、天からは甘露が降りそそいだといわれます。四月八日のお釈迦さまのお誕生を祝う花まつりに、誕生仏に甘茶をかける行事は、この時の故事に依るのであります。

そしてお釈迦さまは、東に向かって七歩あゆまれ、あの有名な「天上天下唯我独尊」と、初声をあげられたのであります。

誕生仏は、右手は天をさし、左手は垂れて大地をさしておられます。

「あめが上にも、あめが下にも、我にまされる聖者なし」と叫ばれたという伝記は、むろん、

お釈迦さまを神聖視するあまりの、作られた物語ではありますが、もう一步深く、この言葉をかみしめてみますと、尊いのは私だけでは、世界中に、たったひとりの、尊い生命いのちを持つあなたよ。その生命こそが尊いのだ。とも言うっておられるように思います。

未来の仏陀を生んだマヤ夫人は、その七日のちにお亡くなりになってしまいます。

マヤ夫人の死は、聖者を生んだという歡喜に色どられていたでありましょう。それが、仏陀の母親の宿命であつたのかもしれない。

はじめに悲しみがあつて、お釈迦さまは仏陀への道を歩まれたのではないのでしょうか？

生まれると同時に母親を失うことは、人間として生涯負い続けなければならない悲しみであります。お釈迦さまが、なぜご自分の出生を語り残していないかということは、深い悲しみに裏打ちされているからだと思えてなりま

せん。

生まれた時、どんなに母が喜んでくれたか、幸せにあふれた気持ちでどうやって抱きしめてくれたのか、そんな思い出をやさしく語り伝えてくれる母親はすでになかったのです。

慈しみにあふれた、やわらかな母の声も、あなたかな母の乳房のぬくもりも、お釈迦さまはお持ちではなかったのです。

お釈迦さまを聖視するあまりに、仏典は、人間としての根源的な悲しみを、一切きり捨ててしまっています。マヤ夫人の妹のマハープラジヤールバティが、母のかわりにやさしく抱きしめてくれても、幼年のシツダルタ太子の胸の奥底はいかばかりだったでありましょう。

生を受けた時すでに深い悲しみと共にあり、紅顔もやがては老いさらばえていく無常と、病の苦しみを知って、死の恐怖におののく畏れを見据えておられた若き日のお釈迦さまは、し

かしそれが仏陀となるための宿命だったのでありましょう。

お釈迦さまは、決して、私たち凡夫の愚かな悩みを無視したりはなさいません。なぜなら、お釈迦さまもかつては一人の人間として悩み、苦しまれたからです。

一切を捨ててカピラ城から出離しゅりする時も、万感の思いを胸に秘めておられたはずです。父や、妻や、子や、臣民たちへの激しい愛を絶ち切らねばならなかった苦しみや悲しみは、測り知れません。はじめてのお子に、ラゴラ（邪魔者）と名づけられたのは、深く愛すればこそ、別離の苦しみがつものることへの畏れと、それ故に、別れの決心が揺らぎそうな自分への叱咤しちたであられたろうと思います。

限らない愛と、限らない悲しみを込めて、ッラゴラッと、血を吐く思いで叫ばれた父親の働



ルニビニ・マヤ夫人堂



哭が、胸に迫ってまいります。

その時お釈迦さまは、ご自分がお生まれになった時のことを、重ね合わされておられたのではないでしようか。

母親を知らずに育った自分は、今また愛しい我が子に、父親を知らぬ子としての道を歩ませようとしている。父として分け与え、残すものは、自分と同じ悲しみでしかないのか。そして自分は、己れ自身の救いを得んが為に、数えきれない人間を悲しみに追いやろうとしている。悟りを得られる前のお釈迦さまは、私たちと同じように苦しまれたのです。私もひとりの父親として、この時のお釈迦さまのお心をのぞいているのかもしれない。

一時の不幸に耐えて、やがては永遠の救いを与えられる日が来るわけですが、それがお釈迦さまの使命であり、ラゴラ王子の使命でもあったのです。

お釈迦さまがお生まれになったルンビニは、今は荒れ果てて、ひと気のない野原に、わずかな遺蹟が残っているばかりです。巡礼者以外は訪う人もありません。

仏教は、ここからはじまったのです。

ルンビニは、お釈迦さまの教えを受ける私たち仏教徒にとって、よろこびの聖地です。

しかし、お釈迦さまにとっては、悲しみのほじまりの場所だったのかもしれない。息を引きたられたクシナーラは、歩いて二日ほどのところだといわれます。

母と関ることのできた唯一とつ場所。そのルンビニで、赤子のように母にすがりたいと思われたのでしょうか。

お釈迦さまの、尊い御教えと共に、生涯持ち続けられたであろう悲しみにも、思いを馳せていただきたいと思います。

合掌